

東アジアの伝統仏教学と近代仏教学

Traditional and Modern Buddhist Studies in East Asia

場所：東洋文化研究所第二会議室

日時：2019年11月5日（火）午後5時～6時30分

司会 馬場紀寿（東京大学東洋文化研究所）

発表者 柳幹康（花園大学国際禅学研究所副所長）

「東アジアの『宗鏡録』—中韓日における受容と展開」

一色大悟（東京大学ヒューマニティーズセンター特任助教）

「東京大学における仏教基礎学研究的伝統と近代」

東アジアの近代知を考察する場合、前近代から近代にわたる大きな流れとして、仏教を無視することはできない。中国では康有為、章炳麟、梁啓超らの革命思想家が、日本では井上円了、和辻哲郎らの近代思想家が仏教思想の影響を受けていた。

本シンポジウムでは、宋代以降の東アジアで仏教の教科書・百科全書の役割を果たした『宗鏡録』の諸影響と、東京大学における近代仏教学の成立に焦点を当て、東アジアの仏教知の伝統と近代を考察する。

主催：科研費基盤研究（B）「東京学派の研究」

共催：東京大学東洋文化研究所（IASA）・ヒューマニティーズセンター（HMC）